





内地雜居論

ルマニ呈スル稿

居留外國人ヲシテ商業或ハ職務ニ従事スルカ  
 為メ自由ニ日本ノ内地ニ入ラシムルノ論ヲ考  
 究スルニハ(第一)一般ノ論ト(第二)今日實際ノ形  
 勢ニ於テ日本ニ其利害得失ノ如何トヲ以テス  
 一トナリ元來開化諸國ノ間ニ於テ彼我ニ交  
 通貿易ヲ為スノ自由アルハ現ニ萬國公法ノ定  
 理トスル所ニシテ即チ天理ニ順ヒ各國ノ當ニ  
 遵守スヘキ人道ノ義務ナリトスウツタル故曰  
 ク(第一)章ニ業人若天理ニ違ハサランテ欲セ  
 ハ相互ニ通商ニ従事スルノ義務アリ人既ニ然

レハ邦國ト云々亦此義務無カルヘカラスト又  
曰ク第百三章地球ハ造物主ガ總ベテ人類共  
同ノ住所トナシ且ツ之ニ食物ノ供給ヲ以テシ  
タル人類一般ノ所有クレハ人皆共ニ此地球ニ  
居住シ生活ノ需要物ヲ之ニ取ルヘキ天賦ノ權  
利アリト  
然レ此人類普通ノ權利タルヤ固ヨリ不完全ナ  
ル權利ト稱スル所ノ者ニシテ之ニ應スルノ義  
務ニ於テハ各政府ノ裁制隨意ニ在リ是ヲ以テ  
政府ニ於テ一般ニ外國人ノ其領土ニ入ルヲ禁  
スルモ亦自國ノ便宜ニ由テハ或ハ特別ノ場合  
ニ之ヲ禁シ或ハ某人ニ限テ之ヲ禁シ或ハ特別  
ノ音趣ニ由リ或ハ特別ノ制限ヲ設ケテ之ヲ禁

スルモ都テ妨テスルハ不然此又ウツテル氏ノ  
說ノ如ク凡ソ國守タル其國ノ人道義務ヲ尊  
崇シ戒慎ス以テ其君權ヲ施用セサルヘカラス  
故ニ同氏云ヘリ外國人ニテ正當ノ目的ヲ以テ  
内國ニ通行スル居住セシムルハ其國ノ君  
主ニ於テ特別緊要ノ理由ハクモテハ其國ノ  
ヲ拒絕スルヲ得テラ不何ナレハ外國人ノ其  
内國ニ通行スル居住スルハ無害有益ノ事ニシ  
テ天理ニ於テ國主之ヲ拒斥スルノ權利ナク若  
シ充カノ理由ナク妄ニ之ヲ拒斥スルハ則チ其  
義務ヲ破リ不理由ノ行ヲ為ス者ニシテ畢竟其外  
權ノ妄用ニ過キサレハナリトウツテル氏又明  
言シテ曰ク宗教相同シカラサルノ故ヲ以テ外

國人ヲ拒絶スル充分ノ理由ト為ス可カラズ宗  
教ノ異同ハ人道ノ權利ヲ褫奪スルニ非ルナリ  
ト

是レ外國人ニ内國ニ容ル、ノ天理ヲ説ケル一  
般ノ論ナリ故ニ現今各國ニ於テハ皆此天理ヲ  
確守シ相互ニ自由完全ノ交際ヲ結フ、即チ其  
義務タルヲ知ル可シ何トナレハ天理ノ國ニ於  
ルヤ人ニ於ルト異ナルヲ無ク均シク之ヲ守ル  
ヘキノ義務アリ依テ人ノ相互ニ尽ス可キ所ノ  
義務ハ國ニ於テモ亦相互ニ尽サ、ル可カラズ  
故ニ國ハ天理ニ於テ相互ニ人間社會ノ交際ヲ  
ナサ、ルヲ得サレハ其社會ノ安全便利ノ為ノ  
ニ要スル所ノ義務ニ至テハ亦相互ノ間ニ遵守

セサルヘカラス若何國ニテモ故意ヲ以テ人間  
社會ノ天理ニ戾ル事アレハ各國擧テ之ヲ慣習  
法ノ違反ト為スノミナラス又一般ノ安全便利  
ヲ妨害セル者トナサ、ルヘカラス  
今歐米諸國ニ於テ商業ヲ營ミ職務ニ就キ若ク  
ハ居住ヲ占ムルカ如キ正當ノ目的ヲ以テ外國  
人ノ隨意ニ其内地ニ入ルヲ許スハ畢竟前ニ述  
ヘタル一般ノ論ニ從フ者ナリ唯戰爭ノ時ニ當  
テハ憤激ノ為メ道理ヲ顧スシテ此例規ヲ破ル  
トフレモ是レ絶テ無クミテ僅ニ有ル所ナリ既  
ニ千八百七十年日佛戰爭ノ時ニ當タリ佛國政  
府ハ其國內ニ居住シタル日人ヲ攘斥シタレ氏  
日國ニ於テハ其領内ノ佛人ヲ追逐セザリシヲ

以テ當時ノ輿論ハ大ニ日國ノ措置ヲ稱セリ是  
故ニ日國ハ大ニ開墾ノ理ヲ固クシ正義有徳ノ  
名ヲ博スルヲ得タルナリ  
然レハ今ヤ日本ニ於テモ其權利及ニ時勢ノ要  
スル所ニ隨テ外國ト貿易交通ノ親ヲ保續セシ  
ト欲セハ宜シク他ノ開化諸國ノ慣習ト主義ト  
ニ成ルヘク及戻セスレテ以テ其聲譽ヲ失ハサ  
ラニテヲ務ムヘキナリ外國ニ於テハ固ヨリ當  
然ノ規則トナシ若シ之ヲ違犯スルハ忽チ人心  
ヲ激動シ争乱ヲモ挑発ス可キ事トナスニ由リ  
日本ニ於テモ極メテ緊要ノ理由ナクシテハ安  
ニ之ヲ犯違セサルヲ以テ第一ニ義務トナサレ  
ル可ラズ實ニ外國ニ於テハ自由ニ他國ニ入ル

ノ權利ヲ以テ恰モ外國公使ヲ辱有ル犯スヘ  
カラサルノ權利ト同視スルノ状アリ  
人ニヤヨ國ニセヨ相互ニ同一ノ權利ヲ享有ス  
レハ又其義務ヲモ同一ニ承諾遵行スヘキハ固  
ヨリ然ラサルヲ得可ラス今爰ニ人アリ其權  
利ヲ享有スルカ為ニ盡サレヘカラサルノ  
義務ヲ守ラズニハ誰カ其人ノ權利ニ對シテ信  
用ヲ置ク者アランヤカルウオト曰ニ第百九十章法  
律ハ都テ均一主義ニ基キ衆人ニ對シテ異同ア  
ルヘカラズト蓋シ各國ノ徳義ニ由テ相結合ス  
ルヤ互ヒニ同等ニシテ均一ノ性質ヲ有スル者  
ナルニ由リ彼令何國ニモ自國ヨリ讓與セサ  
ル所ノ權利ヲ他國ニ對シテ要請スルヲ得可ラ

ス但し權利ト義務ハ物貨ノ如ク賣買交易スヘ  
キ者ニ非ラサレハ何國ト雖其自國ノ要スヘ  
キ權利ト自國ノ盡スヘキ義務トヲ隨意ニ撰ル  
テ得可ラカルナリ元來權利ト義務トハ互ニ密  
著スル者ナレハ萬國公法ノ義務ヲ守ラカル國  
ニ於テハ萬國公法ノ權利アルナリ故ニヘフ  
トル氏曰一國孤立シテ他國ト交通セサル者ハ  
萬國公法ノ列ニ入ルヲ得ズ故ニ何國ヲ論セス  
特別ノ理由ナクシテハ外國人民ノ其領土ニ入  
ルヲ拒ム能ハス若シ安リニ之ヲ拒マハ歐羅巴  
諸國ニ於テハ之ヲ一ノ犯罪ト看做スヘシト但  
シ是レ他ノ萬國公法家ノ皆共ニ同意スル所ノ  
説ナリ

上ニ述フル所ノ理由ニ據テ見レハ實ニ外國人  
ヲ日本ノ内地ニ容ルヲ許スト否ノ論ハ大ニ  
現今此國政事上ノ難事ト連接スル者ト云フヘ  
シ而シテ此難事タルヤ若シ日本ニ於テ歐洲諸國ノ  
公論ノ德義カラ以テ輔翼セラレ、ヲ得ハ其困  
難大ニ減スヘク且日本ヨリ歐洲諸國ニ對シ我  
ハ都テ汝ノ萬國公法ニ於テ議認スル所ノ義務  
ヲ遵行スルニ汝何ノ故ヲ以テ公法上相當ノ權  
利ヲ我ニ許典セサル乎ト曰ハ、歐洲諸國ノ公  
論ハ必スヤ大ニ日本ノ利ニ傾向スヘキナリ而  
シテ今日ニ在テハ權利義務ノ互ニ均一ナラサ  
ルカ故ニ彼我ノ國益互ニ差異アリ然ラ雖凡若  
日本於テ尚依然トシテ孤立ノ便益ヲ得ント

セハ外國ニ於テモ亦其兵カト権謀ヲ以テ現ニ  
收得セル持権ノ便益ヲ保續スルヲ是トスルノ  
公論アルニ至ルヘキナリ  
故ニ余惟フニ日本ノ内地ヲ開テ外國人ノ移住  
ヲ許サハ外國政府ト亟ニ德義上ニ於テ日本ニ  
接遇スルヲ其相互ニ接遇スルカ如クセケルヲ  
得サルヘキカ故ニ日本ノ國勢モ亦自ラ大ニ皇  
張スヘシ且ツ法律ノ定理ハ皆ニ德義ニ基クノ  
ニナラス又財用ノ要務ニ基ク者ニシテ財用ノ  
要務ハ人々又ハ國々ノ間相互ノ助力ニ由テ生  
出スル者ナレハ歐米各國ニテハ既ニ數百年前  
ヨリ外國人ヲ内地ニ入レシカ為メニ國カラ増  
殖セルヲ實ニ莫大ナリ又合衆國ノ如キハ其國

力及開化ノ進歩迅速ナリシハ概テ外國人ノ移  
住ニ由リテ成ルルニ由リ且今日歐洲ニテ開化ノ  
上流ニ在リ獨逸英倫佛蘭西等ノ其農工技  
藝學術ヨリ文武諸職皆悉ク内外共  
同ニ結果ニ至リテ一國ニ其進歩ヲ以テ偏ニ自國  
ノ効力ナリト爲ス得ヘキ者ハ曾テ之レアラ  
ザルナリ世間無數ノ創製物ハ外國人ノ輸入傳  
習スル所ニシテ各國皆常ニ外國人ノ勞力資本  
及テ智徳ノ勢力迄モ之ヲ使用スルカ故ニ歐洲  
到ル所トシテ數千萬ノ外國人農工其他各種  
職業ニ從事シテ地ヲ開墾シテ實大ニ政界  
ヲ以テ無量ノ便益ヲ得ルナリ故ニ日本ニ於テ  
モ亦此政界ヲ用ヒテ到底同一ノ果實ヲ結ル

ハ必然ナリ是是重タル世人皆善ク知ル所ノ常  
事タルヲ故ニ余ハ此論點ニ就テ唯日本政府ノ  
歐洲諸國ニ於テ德義上及財用上最高高ノ政理  
ニ後テ外國人ヲ其内國ニ入シタルノ政畧ヲ取  
用セザルヘカラサル旨ヲ一言シテ段落トトス  
ヘシ

唯是ニ重キヲ陳論スヘキ事アリ此財用ノ交  
易ニ於テハ敢テ日本獨リ其利益ノ專ラニス可  
ラス日本人カ外國人ヨリ農工商ノ術業ヲ學ハ  
サレバカラザル固ヨリナリト雖モ外國人モ亦必ス日本  
人ヨリ學テ所ノ事アルハ主ニ殊ニ外國ノ**交際愈**  
**親密ナルニ**隨テ日本ノ藝術工業業高キ能ク世間  
知ル所トナルニ至テハ其素ニ在ル之ヲアルハ

然ルニハ外國ニ於テ日本ノ物産ヲ要スルヲ或  
ハ日本ニ於テ外國ノ物産ヲ要スルヨリモ却テ  
多クニ至ルヤ疑ナシ現ニ今日日本物産ノ輸出ハ  
外國物品ノ輸入ニ比スレハ其増加ノ割合多キ  
ニ居ルヲ視レバ外國ニ於テハ自國ノ物産ヲ日  
本ニ輸入スルヨリハ日本ノ物産ヲ輸出スル  
ヨリ尚利アリト爲ルカ如キ是ヲ以テ若シ日本  
ニテ外國人ヲ内地ニ入ルニ至テハ日本ノ物  
産之レカ爲テ増殖シ輸出モ亦隨テ倍蓰スヘ  
カレハ外國ニテ日本ノ通商ヨリ得ル所ノ便益  
大ニ増加スヘシ而ルニ若シ日本ニ於テ尚内地  
ノ関カスハ外國人ノ目ヨリ之ヲ觀萬國公法  
ノ理ニ據ラ之ヲ判スルニ不正ノ計策トナサ、



ルヲ得ス然レハ不當ナルカ如キモ外國政府モ  
亦此計策ニ應スルカ爲メニ利息ノ政略ヲ施ス  
ハ必定ナルヘシ  
余又一步ヲ進シテ日本ハ果シテ歐米諸國ノ政  
略ヲ取用スル能ハサルカ如キノ實況アルカラ  
考究スヘシ余ヲ以テ之ヲ視レハ決テ此ノ如キ  
實況アリト考フル能ハス從來外國人ヲ僅カニ  
數ヶ所ノ開港場ニ任セシムルニ現ニ其ノ日本  
ノ利益トナラサルヲ以テ若シ日本ノ全國ヲ開  
テ自由ニ外國人ヲ容ルニ至テハ日本ノ不利  
益々加ハルノ恐レアリト爲ヒリ故ニ余ハ決テ  
此ノ恐レナキ所以ヲ表示シ且日本ノ不利ハ反  
テ從來外國人ニ抑制ノ政略ニ施スニ在ルヲ

一

辨明セントス  
抑日本ノ開港場ニ於テ外國人ノ大體皆商賈  
ノ利益ニシテ其財本ヲ使用シ他國ノ物産ヨリ  
利益ヲ收得スルヲ以テ營業ニ當リ者ナリ而シ  
テ此ノ如クシテ其利益ヲ得ル者散テ不正ノ所  
行ニ非ス又日本ノ爲ニ散テ無益トナリ不可  
ラサルナリ何トナリ商業ニ物産ノ價格ヲ騰  
貴シテ輸出スルハ其利益ノ爲メニ外國商人ノ得ル  
亦隨テ進歩スルハ然レバ外國商人ノ得ル  
亦所ノ利益ハ則チ日本ノ負債ト爲リ日本ノ物  
産ハ右負債ノ利息ニ同様ニ年々空シク外國人  
ノ掌中ニ悉クテ日本ノ損失ヲ醸シ以テ富國ノ  
道立テ難キニ至ル然レバ外國ノ通商ハ當初必ス

此ノ如キ者ナレハ是決シテ尤ムルヲ得可ラス  
只其代リニハ日本ニ於テ外國ノ資本ヲ入レ又  
其良工ヲ移シ以テ自國ノ物産ヲ繁殖スヘキナ  
リ而ルニ此資本ト良工ヲ日本ニ入レシニハ内  
地ヲ開クニアラサレハ能ハス何トナレハ現今  
數ヶ所ノ港ニアル外國人ハ通商ノ爲メニ移住  
スル者ノミナレハ外國ノ職工人夫及其他ノ商  
業者ニ至テハ此等ノ商人ニ就テ各自ノ職務ヲ  
得ル能ハサルカ故ニ彼輩ノ此國ニ來航スル者  
殆ト稀ナリ然レモ若シ外國人ヲ内地ニ容ルニ  
至テハ皆各容易ニ肝要ノ職業ニ就テ得テ隨テ  
内國ノ物産工藝及政府ノ財源ヲモ増殖スルニ  
大ニ補益アルヘキナリ

ニ 從來開港場ノ外國人ハ大概商賣ノミナリヲ以  
テ外國政府ノ之ヲ爲メニ保護スル所ハ唯々通  
商ノ利益ノミニ止マレリ抑商人ナル者ハ最モ  
利ニ没々ニ其本務トスル所ヲ得ルニ在リ  
テ正道德義ノ大理ニ頓着セリルヲ常トス故ニ  
外國ノ政略ニ於テモ亦商賣ノ如ク利己ノ性質  
ヲ帯ビ人生ノ高尚ナル利害ニ至テハ深ク注意  
スル下ナレハ外國公使ノ所説ハ則其自國商  
人ノ意ナレバ若シ其ノ保護スル所商賣ノ利  
益ニ違ヒ止マラスニハ安ソ夫レ此ノ如クナラ  
ズ且傳教師ノ如キモ其熱力ヲ自國ノ政略上  
ニ施及スル者多シトモ其熱力經濟上ノ利益ヲ主ト  
スルハ今日一般ノ通情ナルヲ以テ其熱力ハ稍

微弱。シテ通徹ムルヲ得可ラズ故。今若シ外  
國人ヲ日本ノ内地ニ入ルニ至テハ經濟上及  
物産上ニ於テハ別ニ又外國ノ爲ノ數多ノ利益  
ヲ生出スルヨリシテ高利ノミヲ專ラトスルノ  
弊ハ自ラ消滅ニ屬ス。是ヲ以テ外國人ニ移  
住就業ノ自由ヲ許スハ今日日本政府ノ要務ニ  
シテ外國ノ利益モ此政略ニ由テ以テ増殖シ莫  
利益又廣ク衆ニ及フ。キタ故ニ日本ヲ以テ是  
迄ノ如ク唯其國人ト公益ヲ共ニセサル商賈等  
ノミ利ヲ得ルノ場所トハ看做サ、ルニ至ルハ  
キナリ。且ツ是ノ政略ハ中外不知ノ時ニ當リテモ亦至  
大ニ効用アルヘシ現今ノ狀態ニテハ外國人ハ

唯教ヲ所シ海況ニ居留スル由、強キニ爲シ、非  
モ容易ニ自國海軍ヲ保護シ、彼其新陳及物産  
ノ如キハ忽チ之ヲ船中ニ運出シ、其難ク避  
ルヲ得ルハ故ニ板令日本ト外境ノ實際被シ、  
コトアリトモ深ク之ノ怨ハ強シ、故ニ其利益ヲ  
國ノ人民ト只外面ノ關係有スルニ止ルヲ  
以テソノ居留ノ國ヲ去ルニ容易ニ爲シ、然レ  
モ若シ之ノ内地ニ居住シ、許スニ至ルニ其交際  
ハ親睦ニ赴キ、彼我ノ間利益ノ關係モ亦深ク切  
至リ、僻隅ニ居住セザレハ其利益ノ關係モ  
必ス外面ニ限ラザルニ至ル。然レハ其利益ノ關係モ  
府ニ於テ日本トノ交際ヲ破リ、日本ノ實益ヲ  
害スルニ至ル。甚ク其ノ容易ニ不可ナク、知

ルハ一國之現時ノ景況ノ如ク外國人ノ利害唯  
高き一國ニ止ルニ於テハ日本ノ國安ハ動  
ルモスレバ外國ノ感情ノ毒ニ害セラル、  
ラントスルニ若シ外國ニ於テ輕忽ニ事ヲ起  
ラ得ルニ至ラハ及テ謹慎ヲ以テ日本ニ交リ  
深ク其實益ヲ注意ス可キハ固ヨリ論ヲ俟タ  
ルナリ

四 外國ヲレテ辺隅數ヶ所ノ海港ニ聚合セシムル  
ハ日本人トノ文障ニ於テ及テ彼ニ勢カク有セ  
シムルノ基ニシテ則日本人ト分離シテ自ラ一  
社會ヲ爲シ其ニ社會タルノ特權ヲ安請シ施用  
スルニ至ラシムル所以ナリ特ニ彼輩ハ多分皆  
商人ナレハ其職業ノ性質ニ由リ遊樂ヲ爲シ非

ハ散入、  
カレハ散ラ内地人氏ト混同スル由クナリ若  
シ此ニ如キヲ以テ此國ニ在テ此國人人氏ト  
政治上全ク分離シ例ニ依テ如キニ如キト  
日本國內ノ英領領民地トモ云フニ如キ  
又アリ自己ノ金錢アリ銀アリ郵政高ナリ外  
國人ノ特權特許悉ク滿ハルニ至リテ元  
來民衆アリハ政府ナカルハカラス民衆ナケレ  
ハ政府アリナシ畢竟英國公使ヲ以テ政治  
上ノ事ニ交渉スルヲ口實アラシムルモ主トシ  
テ横濱如キ外國人衆合ハ地アルニ是レ由ル  
テ今般に横濱ノ外國人ヲシテ日本ノ各地ニ  
散在セシムルハ英國ノ口實ハ忽チ消失スヘシ

モ決メ横濱ノ居留地ニ鮮教スヘシト云フニハ  
アラズ唯教ヲ所ノ土地ニ外國人ノ多衆ヲ聚合  
スルノ勢ヲ預防スルハ日本人ノ為メニ至要  
ノ事ナルヲ論スルノミ而シテ此聚合ノ勢ヲ預防  
スルニハ唯外國人ノ内地居住ヲ許ス一事ニ  
在リ若シ然セムニハ他日横濱ノ日本ニ害アル  
猶香港ノ支那ニ於ルカ如クアルヲ保ス可カラ  
ス實ニ恐ルヘキナリ

五 加之内地ヲ開テ外國人ヲ容ルレハ各國移住人  
民ノ比例ニ多クノ増減アルハ必然ナリ従来此  
國ニ居留ノ外國人ハ概テ皆商人ノミ而シテ英國  
ハ宇内ニ於テ最モ商賣ノ財本ニ富裕ナルヲ故  
ニ外國人ノ日本ニ在ル者モ英國人ヲ以テ多シ

ト必然此國ニ於テハ獨逸人以太利人ノ如キ  
尚他國ノ人民ノ増殖センコトヲ要スル事ニ  
ルシテ元來獨以等ノ人民ハ英國人ノ如ク侵掠  
奪取ヲ事トスル者ニアラスシテ其財本モ亦寡  
少ナルハ多分此等ノ國ヨリハ有用有益ノ職工  
人民ヲ送致スヘク而シテ如ク各國人員ノ比  
例變換スルニ至レハ他ノ外國政府ニ於テモ亦  
必ス和親慈悲ノ志望ヲ起シテ日本ノ利益ヲ謀  
ルニ至ルヘキナリ  
又日本ノ内地ヲ開ク事ハ外國裁判權ニ關シテ  
更ニ重要ノ關係アリ國ヨリ日本ノ状況今日ノ  
如クニハ此裁判權ノ廢棄ヲ望ム可ラスト且  
氏外國公使ノ談話ヲ聞クニ決テ此裁判權ヲ讓

其スルノ意ナキニハ非ス唯日本ノ裁判法未ク  
歐洲人ニ適當セザルノ故ニ能ハサルナリト言  
ヘリト云フ蓋シ此言ハ大ニ其實ニ過ル者アル  
ヘシト云フ蓋シ實際ノ経験ヲ以テスレハ此説ヲ排  
駁スルヲ得ヘキ者無ルヘキニ由リ公使ニシテ  
敢テ此言ヲ陳セザリシトモ云フ可ラス必竟外  
國公使ノ論ヲ未スハ日本ノ事情明ナラザルニ  
由ル者ニシテ善ク國情ノ世潮ニ通知セラレハ  
ルニ於テハ公使ヲシテ其論ヲ変更セシムル  
能ハサルヘシ而シテ日本ノ制度ヲ瞭知セレ  
ニハ日本ノ刑テ之ヲ容ルニ若カザルナリ元  
米外國ニ於テ日本ノ裁判ヲ嫌厭スルヲ以テ名  
譽ト爲シ得策ト爲セルハ其人民ヨリハ却テ其

政府及ヒ公使ニ於テ特ニ甚シトス然レモ歐洲人  
ト雖モソノ自國裁判法ハ徒法ニ涉リ錯雜ニ失  
セルヲ患フルハ恰モ外國公使ハ日本裁判法ノ  
確實ナラスミテ欠典多キヲ患フルト一般ナリ  
現ニ歐洲ニ於テモ詞訟ハ必ス損失ヲ来ストハ  
常ノ諺ノ如クニ人ノ言フ所ナリ故ニ若シ内國  
ニ居住スル所ノ外國人ヲシテ實地ニ日本ノ裁  
判法ニ從ハシムルニ至テハ各國皆ソノ平生ニ  
日本ノ裁判法ニ付テ患フル所ノ當否如何ヲ判  
知スヘク是ヲ以テ今日日本政府ノ要務ハ各國  
人ヲシテ之ヲ實驗セシメ然ル后ヲ以テ南港場  
ノ治外法權ヲ論破スルニアリ若シ日本ノ裁判  
法ニ據テ所置宜キヲ得ハ外國人ハ實際ノ經驗

ニ由テ始メテ從來ノ邦ヲ知リ且ツ其萬國公法  
ノ本理ニ指觸スルヲ恰ルニ至ラハ復テ此特權  
ヲ保續スルノ口實無ルヘキナリ故ニ日本ノ裁  
判權ヲ以テ外國人ヲ内地ニ管轄スレハ外國ノ  
裁判權ハ必ズ之ヲ破壞スルヲ得ヘシ而テ其良  
法ハ左ノ如クスルニ在ルヘシ

(第一) 此國ニテ外國人ノ開港場ニ於テハ域  
外人民タリ内地ニ於テハ所屬人民タル兩様  
ノ性質ヲ有スルヲ得サルハ則チ設ケ開港場  
ニ住居スル外國人ニシテ自身又ハ代人ヲ以  
テ内地ニ支店ヲ設ケル中ニ其外國人ノ開港  
場ニ於テモ亦全ク日本ノ裁判法ニ從ハシム  
ヘシ

(第二) 情理裁判所ヲ設ケテ現今ノ領事裁判  
所ニ代ヘ其職員ハ最初ノ程ハ天皇陛下ニ對  
シ忠節ヲ誓フ立テタル外國人ノ過半ヲ用  
ヘシ此ノ如クセハ適當ニ日本ノ裁判權ヲ收  
復スルニ至ルヘシ

然レ日本ノ内地ヲ開クニ就テ外國ニ於テハ其  
讓与ヲ内地ガケニ限リ開港場ニアル外國人ノ  
特權ハ尚之ヲ固守スヘケレハ現今ノ外國裁判  
法反テ勢力ヲ加ルヘキヲ恐レアリト雖モ氏ソ  
事ノ勢力ハ人ノ思想ヨリハ常ニ強大ナル者ナ  
レハ若シ外國裁判法ノ大休ニ於テ破ル、所ア  
ラハ其餘ハ終ニ皆必ス崩潰スルニ至ルヘシ且  
ツ事實ノ勢ハ言論ヨリ強キカ故ニ事實ヲ以テ

外國入口實ニ抗拒スルハ日本ノ政畧ニ利アル  
ヘキナリ  
七 従前ノ開港場ノ外更ニ數ヶ所ノ新港ヲ開クニ  
全ク是昔時鎖國ノ政策ヲ保續スルニ外ナラス  
コト日本政府ノ為メ外交ノ德義ニ毫モ利益ス  
ル所ナケレハ寧ロ日本ノ全國ヲ開クノ可ナリ  
ニ若カサルナリ加之現今ノ制度ニ隨テ中外ノ  
人民互ニ分離シテ通商ニ從事スル中ハ今ノ開  
港場ノ如クニテ既ニ充分ナレハ更ニ新港ヲ開ク  
モ經濟上ニ於テハ格別ノ影響ナカルヘシ且ツ  
日本ノ大主眼ハ他國ト對等ノ地位ニ立テ而テ  
物産開發ノ方法ヲ擴充スルニアレハ速ニ鎖國  
ノ政畧ヲ抛却スルヲ良策トス若シ外國交通ノ

自由ヲ拒絕スルハ高今日ノ如クナラハ假令外  
交ノ為メニ更ニ一ヶ所若クハ多少ノ新港ヲ開  
クニ毫モ有益トナス可ラサルナリ  
八 歴史ヲ按ズルニ領事裁判ハ中古ノ時代ニ於テ、  
東方ノ諸邦及歐洲各國ニ皆行ハレタル法ナリ  
是一ニハ當時封建制ノ行ハレタルト又一ニハ  
外國人ヲ拒斥シテ各自ノ國人ト交通セシメサ  
ルノ俗ナリシカ為メナリ外國人ニ於テハ特別  
ノ社會ノ起立セサル可カラサルカ故ニ亦特別  
ノ裁判權ヲ有セサルヲ得サリシナリ然レ爾來  
封建制廢セラレ、ニ及テハ領事裁判所モ亦共  
ニ廢セラレ内外人相互ニ親密ニ交接スルニ  
至レリ之ニ由テ考レハ日本ニ於テモ亦當ニ然



ルハキ理ナリ今ヤ封建既ニ廢セラレタレハ宜  
ク外國人ヲ許ルノ内國ノ社會ニ入ラシムヘシ  
蓋シ中外ノ裁判法ヲ合一ニスルハ法律ヲ合一  
ニスルニアリ法律ヲ合一ニスルハ利害ヲ合一  
ニスルト義務及權利ヲ均一ニスルトニアリ而  
ノ如是クセンニハ唯往昔ノ鎖國策ヲ抛却シテ  
外國人ヲ内地ニ入ル、<sup>一</sup>恰モ歐米諸國ニ於テ  
日本人ヲ入ル、カ如クスル外ナキナリ是故ニ  
余ハ断然日本ノ内地ヲ全ク開クヲ以テ日本ノ  
大利益ナリト論決ス何トナレハ一ニハ世界各  
國ノ皆承認シテ實行セル所ノ法理ト人道ノ通  
理ニ違ハサルコソ政略ノ宜キヲ得タル者ト云  
フヘク又ニニハ日本ニ於テ此政略ヲ施行スル

外ハ財用及國政上ニ多ク緊要ノ便益ヲ得殊ニ  
外國ノ特權ヲ減殺スルニ利アレハナリ

千八百<sup>七</sup>十九年六月

Faint, illegible vertical text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

